

国木田独歩佐伯での生活(三〇)

故山内武麒

九日

妄想とは何か、空想とは何か

世人はよく哲学者や文学者、詩人・宗教家を悉く妄想空想の徒であるという。

何ということか。妄想と空想とは人間通用の弱点であつて、自分は一實際眞実の世界に住んでゐると思つてゐるものもそれぞれの妄想空想をしてゐる。国家とか社会とか、殖産とか実地とかなど、地上のことは妄想ではないとしてゐるものも、彼等の脳裏には様々な空想や妄想に満たされてゐる。

あ、人の心を啓発するものは誰か、

世の人は共同的な利益を公益といつて、その他のものはみんな空であり虚しいもので、夢のようなものであるとする。彼等はまことの人生を知らないのである。

嗚呼人類。嗚呼宇宙。

もろくの個人に告ぐ。爾は人類にして爾は宇宙の

ものなるを。

と、妄想や空想に耽つたり、小さいことにこせこせと考へることより、広い大きな心を持つと云つてゐる。

次に

今日海水に浴す。海波、静かに磯を打て来るを見る。天茫茫として限りなし。嗚呼此の自然！吾茲に立つ。

と、海水浴をし、その気分のよさを表してゐる。

十一日

昨日は日曜日、午前海水浴をして、午後また富永・尾間・収二の三君と共に海水浴をした。そして

自然に自由に面して、自由に海風と遊ぶ。自由の幸

福はこゝに在り。

と、記してある。

昨日は近頃めずらしい暑さであつた。

昨夜、「梶原」の第一シーンが出来た。

次に

語に曰く、

人生天地間、忽如遠行客　と人類然り。

此の人類の天地間に於ける亦た実に然り。

であるから人は決して曖昧な信念に安んじていることは出来ない筈である。

天地とは冷然とした無窮でたゞものが変化し盲動しているのに過ぎないが、それとも天地は靈心靈神の統治のもとにあつて、人類はそれに愛育されているものか、この二つの一つである。

この人類からすれば、自然後者の方を信じようと欲するであろうが得ることはむづかしい。

この人類の生存は人類自身で作つたものではない。生命の源は神にある。であるから、この生命、この生命を感じるものは神を信じなければならぬ。

次に

場処に於て、空間に於て、無限無窮な大自然の中で生滅浮動している人類、その人生、これは言語を絶する事実である。自分は益々これを感じるものである。

この事実を痛感する。人間の事件、自然の事物、それ自身悉く深い不思議な意味をもっている。

実に人類は自然の児である。自然を忘れて人間を考へることは出来ない。「吾」は人間である。人類を忘れて

自然を思うことは出来ない。これは真理である。

この事実を痛感している。これは根元であり最も大まことの事実に打たれたのである。人事にあつて、恋も歴史も悉くその意味に於て深遠な事実であることを感じる。

自然に於てもそうである。この高偉で壮麗な自然！沈思も冥想もこゝで出来る。

「吾」に取りて此の世界は幻のみ
「吾」に取りて眞実永遠の生命を要す。

と、人間と自然との深いつながりを記してある。

十二日

昨夜「梶原」の第一シーンのはじめが出来た。

次に

名誉は自分を繋ぐに足らない。事業も足らない。美・善・恋、宗教凡て繋ぐに足らない。この天地も、この人間社会も月・花、凡て足らない。

そうだ。自分はたゞ信仰の希う、只だ信仰を。

吾は凡てをあさつて疲れた。たゞ信仰の遠雷を聞いて心がとゞろいた。吾は只だ信仰を希う。

美！ 吾是れを信ぜんことを欲す。

美、吾是れを信ぜんことを欲す

然り、神、然らずんば無。光然らずんば暗

吾は何れかを信ぜんことを欲す。

嗚呼信仰は自由なり。

然り、眞の自由は只だ夫れ信仰なり。

と、信仰を希っているが。

しかし、自分はまだこの自由を痛感することが出来ない。時々一閃の光に導かれてその一端にふれるのみである。

と、自己の足りなさを悔いている。

十三日の記には

昨夜舟を番匠の流れに泛べ月光に棹して、富永氏を灘村の校舎に訪ひぬ。同舟者は尾間・山口、収二の三人吾を加へて四人

月明、流れに満ち山岳の影、倒さまに水に落ち来り四顧寂々、あたかも湖面をゆくが如し。

将来、此の美景、眼にのこり、心に生く。

と、月明の夜の舟遊びの記を書いて、

自分は美を信じることを願っている。

自分はたゞ美の力を信じた。「美を信ず」

と、これはよくない。

寂莫・幽遠・光明・暗澹の世界の中に自分の生がある。古人の生もこゝで消えた、自分はどこに帰えるのか。あたりは茫茫としている。あゝ、自分は信仰を願う。

虚栄・小我・比較・焦念・束縛の衣よ去れ

信仰・自由・大我・眞実の生命よ来れ

と、叫んでいる。

次にこの舟遊びで浮かんだのか、俳句と短歌を記してある。

野辺のすそ 川辺に一つ住家あり

月かげに すかして見れば茅屋なり

誰れが住む 住む人は誰れ問ふまでもなし

世に生れ貧しくぞだち哀れにも寂しく暮す一家なり

名も知れぬ 名もなき浮世の人々ならぬ

この十二日の尾間日記には

今夜舟に棹さして番匠川を下り大江灘に行く。月は皎々として照り渡り、時々黒雲の之を蔽ひ光散じて雲間より迸り出づ。一種言ふべからざるの光景を放つて

四方全世界を照せり。当地発足は八時頃なりしならん然るに遊悠として大江灘に至る時は既に九時半なりき。風と共に来る漣波は月に映じて銀波をなし実に言ふべからざる光景を以て吾人に訓へ賜ひ、吾人をして真に諸物の不思議なるを感じしむ。月と云ひ水と云ひ風と云ひ霞と云ひ実に吾人の能く筆を為す能はざる処なり。富永宅にて談話する処殆んど二時間、帰途に就きしは既に十一時過なりき、再び棹さして番匠川を遡り全て帰宅せしは十二時なりき。

と、ある。電信局を辞めた富永は小学校の代用教員となり灘の分教場に勤務していた。この晩は宿直で学校に泊っていたのでみんなで訪ねたのである。

次に

事実の前に公平で正しく立つことが出来ねば決して信仰に至ることは出来ない。その意は次の通りである。と記して次に

人は新らしく見聞する処に迷ふと同時に又た久しく見聞して熟感する処に同化するもの也。此の故に彼が人生の事実に対するや兎角偏する処ある也。偏すれば盲す。故に其の信念や又た甚だ偏す。天地の間、人生

のうちに起りし事実、宇宙のうち人間の眼前に顕はる、事実。悉く其意味深しと、ある。

今朝鮮事件に多くの人々は耳を熱くしている。しかし山間の月は依然として美しく幽である。貧屋の賤婦は依然として迷い、苦しみ罪の間を出入している。花は美しく垣根にそうて咲き、鳥は空高く雲を突き破つて飛んでいる。

自然、人事は悉く事実でないものはない。人はたゞ自分の習熟するところで人生の只一つの事実としようとす。偏迷し盲従するもとてである。

見よ、国と国と戦い民と民とが戦っている。これは目下新聞紙上に満ちている事実ではないか。

西洋の文明も東洋の文物も、われわれの歴史の跡ののこしている。之れは事実である。

議会が解散された。これも事実である。

地球は遂には滅亡するものである。これもまた想像される事実である。

人間の終極は死のみである。これは事実である。宇宙はホールで限りなく窮みないものである。これ

は事実である。

何か、何か、

吾は人としてこの宇宙にある。宇宙から離れて人生を思うことは出来ない。また人間を忘れて宇宙を考えることは出来ない。

あ、人間！「吾」とはこれである。

と、事実について論じてある。現実から離れてこの人生はないと云っている。

十四日の記

朝鮮の内乱、清国の出兵、吾国民の激昂、欧州兵備過重の圧窄。これら地上での事件は色々ある。しかし、自然は、

月皎々、草青青、天蒼々、自然の運移は黙々として
巖然たり。

沛然として大雨来り、農夫欣々として野に在り、夕陽雲に炎て岳色翠を満たらず

と、ある。

自分はどんな心でこの事実に対すべきか、人が動いて歴史が出来、人が考えて哲学が生れる。

信じる者は人である。

「近代の妄想」は神の世界に生れながらわざわざこれを忘れて、自分の尺度の世界のみに住まうとする。

吾人としてこの宇宙に生れた、これを意識している。

しかし吾はこの宇宙人生のことについて知らない。これは恐ろしい事実ではあるまいか。

と、事実に対して記してある。

十五日

昨日午後六時ごろから葛港に海水浴に行った。その少し前に大雨が降った。

昨夜「景時」を作った。

昨夜、夜更けて一人で月下を散歩した。

無心にして月光に対し、静かに蒼空の星影を仰ぎ見る時に於ては、実に吾が生命と此の巖然なる自然との如何に神聖に相関係するかを感じる也。

と、無心でもものを見ることを記して

どうか自分をして願くば無心で凡ての事実に対させてくれ

と、願ひ、

無心とは公平の意味であり、シンセリテイな自由な独立した意味である。

人が先入観にとらわれずに静かに自由に、独りでまじめに、前にある事実に対する時はまことの知識となる。

嗚呼吾人として月に対せんことを希ふ。

人として、然り、人として、人！凡ての意味はこのうちにあり、豈に月のみならんや、この旧城に、此の茅屋、此の歴史に、此の山川に、彼の大空に、此の墳墓に、

事実！人の驚く可き事実豈に偶然の出来事のみならんや。天地と吾が生と先ず最深最大の事実ならずやと、事実に対しての考え方を思索している。

次に

吾が心慨然として歌はんことを希ふ

心情の大絃は天地人生の神聖に鳴らんとす。

世人の心、滔々として物の形と情の慾と地の虚義とに迷溺す。

吾が大絃一タビ天風にかなでられて神籟来らん

と、虚偽に充ちた世の中を嘆き、大いに憤慨しようとしている。

次に

天地は悠々として際限なく、無窮の時間は無窮を表わしている。自分は月を仰いでたゞこれを使った。宇宙に仰してこの生命を感じる。紛々とした人生にも必ず神の心があるであろう。人情を信じて神に応えよう。

吾、身を投じて救世に赴かんことを期す。神命の祐助を禱るのみ。

と、神の助けを借りて救世の道へ進みたいと願っている

嗚呼然り 大信仰よ来れ

先ず凡ての先入観から脱出してこの身を自由な自然の中に置きたい。

自分は日に日に自由の児、自然の児になりつゝ、ある

自分は自然の児となつて人生や天地の事実裸で接すれば、不自然で世界の神聖さを忘れ、生命の厳やかなことのわからない世人のことがわかる。

十六日

人は自由の児であり自然の児である。

意識されるだけ先ず十分意識せよ。自分は確かにそう

だと感じている。

だから自分より以前に生れた人たちがふんだ跡を模倣するのは愚の極みである。

自分の頭は無窮の天に接し、眼は一人でこの大空の名月に向っている。わが生はわが生である。個人の意識の妙はこれのみである。

生れたことが空であると知るなら自殺せよ。これが最も自然な行為である。決して前人の跡を見てあきらめることはない。生の意味に大信仰があるならその上に決然と立て。前人にまねることはない。

信仰よ来れ、そうでなかったら自分はいつも模倣追跡の束縛を感じる。

次に

凡て自分にあるものは去ってしまったえ、富もあるなら去れ、名もあるなら去れ、希望も喜樂も去れ、妄想も空想も去れ、凡て去ってしまったえ、愚かな知識、偽りの誇りもみんな去ってしまったえ。

信仰でないものは去れ、自分を盲動させ束縛し迷わすものは去れ。

そうして自分は始めて真の自然の兒となつて信仰に充

たされるであろう。宇宙、真理、神、愛、美、凡て自分には空言である。自分は疑いもせず信じもしない。

疑つたら眠ることが出来ない。信じるなら山をもうつすであろう。

愛、美、善、これは天地人間の心か。この地上での時間の生命は幻か。

神聖か、暗黒か、どちらか、

自分は断乎として神聖の愛と善と美とを信じることを欲する。

自分の心はこのように感じる。

嗚呼永遠窮みなき此の宇宙に此の人間！

嗚呼誰れか「神聖」を疑はんとするぞ

と、神聖は疑わない。しかしまだ自分の生命をこの大自然の中に見出さない。憐れな人間だ。更らに光明、更らに信仰を目指せ。

信仰は知識であると確信する。何故なら信仰は心の光を意味し、心の光は則ち知識であるからである。

天を仰いで呼ぶ 愛何処にある。善何処にある。善何処にある、光何処にある。と。

心の中を省みて叫ぶ。どこにあるか、凡て何処にある

か。

度ある。自分をして山をもうつつ信仰に至らしめよ。ダンテの信念はどうか、ルーテルの信念は、近代的妄想を考えると、実に水上の藁のようである。水上の藁船の盲動のような舞踏は亡びてしまえ。

世の人がみんな無信仰で安んじていられようと、自分には出来ない。

凡て生れた凡ての人、これから生れ出るみんなの人がみんな無信仰で生きても自分には出来ない。出来ないことを誇るものである。

自分からあらゆるものは去ってたゞ信仰だけ来れ、これが命である。世の人はみな望むところはまちまちであるが、自分は只だ信仰の火のみを希っている。

と、たゞ一途に信仰を求めている。

十七日の記

吾が生命を感じず。感ずる者すなはち是れソールならずや。

然り生命の生命はソールなり、ソール則ち生命の自覚なり。

吾がソールを信ず。然りソール之れを命ず。否な、ソールかく言ふ。

と、靈魂（ソール）について記してある。

十八日

昨夜教会で感話した。感話したことは信仰は決して言いやすいことでない。極力たゞその靈光を求むべきこと自分が日頃感じていることである。

今日徳富氏に手紙を出す。「此の不幸なる継児を如何にすべき」という題で、女子教育のことについて三枚書いて国民新聞に投書した。

今日種痘した。国元へ荷物一箇送り返す。今日から午前五時から授業を初めた。

次に

近頃は月がとても美しい。昨夕収二と一しよに番匠川の岸に立って此絶景を見、今夕はまた一人で岸の上に立ってこの絶美の景を眺めた。

絶美の景とは何ぞ、左の如し

と、記して、次に

梅雨の候にして梅雨来らず、天常に浮雲漠々たり。

殊に元越山には絶へず団々として黒雲飛散集合千万の
変化をいたす。夕暮、西天の余光水の如き時、月光東
に登り来りて此の団々の雲間よりもれ、番匠の下流、
暗影肅条の処に射落す。凡て是れ肅条のうち一点の
黄金色の光波起る。若し黙々として此の景に対する時
は思はず涙下り嗚呼美なる哉と呼ぶ也

と、ある。番匠川畔の夏の月を美しく描写してある。独
歩は殊の外月が好きであつたらしい。

次に

自分は美を信じていることを願っている。自分は嘆美して
いる。人間は限りない自然のうちに何を求めようとして
いるのか。心を空うしてこの自然に対せよ。

自分はたしかに美の靈妙を通して神の宇宙を宮としよ
うとしている。

嗚呼美しき月よ。爾は何ぞや

吾何ぞや

自然！ 美このうちに充ち、吾は自然の児なり。

神聖なる関係なる哉

と、自然と吾と調和し一致している。と。

自分は確かに一つの靈である。靈は不死である。

神は美と善と愛の源である。故にこの現象界は光と暗
とが交錯している。靈界はたゞ光明である。

自分を動かす事実は何か。それは

神の黙示なれ。然れ美と善と愛の神の信仰来れ。

是れ靈の命なり。

と、絶叫している。

十九日

美を愛し味わえとは云わない。いや、自分が望むのは
賞翫することではなく「神の美」を信じていることである。自
分の靈とこの宇宙の神の美との間に神聖な関係を感じる
ことである。

次に

曰く信仰よ来れ。美と善と愛との神の大信仰よ来れ。

吾が思は乱れ、吾が行は卑く、吾が心は荒れゆく。

何を求め、何を憂ひ、何を惑ふぞ。去れよ、是れ悉

く信仰なき塵世の声なるのみ。然り一線二線、神聖の

靈光は吾がソールに落ち来るを覚ゆ。

と、信仰を強く欲している。この頃の独歩は只だ一途に
神を求め慕う真摯な青年であつた。